記録：土居明生「対談　木口木版のおはなし」

石﨑　三佳子

はじめに

愛媛県美術館では森林環境保全基金を活用し、令和元年度よりコレクション展で「アートの森プロジェクト　森のなぞなぞ美術館」[1]を実施している。

令和2年度は「木の版画はおもしろい！」と題し、「木版画」をテーマにした展覧会を開催した[2]。当館所蔵の畦地梅太郎をはじめ、橋本興家、石崎重利、木和村創爾郎、中尾義隆、二神日満男、菊澤尋吉らの木版画作品に加え、県内でも唯一とも言える木口木版画家、土居明生氏の作品を紹介した。展覧会の関連イベントとして「対談　木口木版のおはなし」を開催し、第1部で当館学芸員が聞き手となり、土居氏に作品や制作について語っていただき、第2部で刷りの実演を行った。

本稿では、第1部の内容を書き起こし、記録する。

対談　木口木版のおはなし

日　時：令和3年10月2日（土）
　　13時30分～15時
場　所：愛媛県美術館　講堂
聞き手：石崎三佳子
参加者：30名

―土居先生は長い間、教員をされていまして、美術会で版画を出品され、愛媛の版画界を盛り上げてこられ、美術館でもアトリエの中でいろいろご指導いただいています。

皆さんに、今回はせっかくですので、展覧会と合わせて、土居先生の魅力をお伝えするため、先生がどのように、木口と向き合ってきたかというようなお話が聞けたらと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

先生は長い間、久万高原町、上浮穴の方で教員をされておられました。学校では、図工を教えられて、授業の中で版画だったり、油彩だったり取り組まれていたかと思いますが。先生は、最初、油彩を描かれていたんですよね。―

（土居）このヒマワリ（作品図版1:《向日葵1》1956年）が、私が31歳のときの作品です。ちょうど黒藤川という学校にいるときに描きました。これが初めて、県美術会に出品した作品です。

―先生は板目木版を学校の中でされていたんですか。―

（土居）板目木版は子どもたちと一緒にやらないかんし、やりよった。当たり前にやったと思います。

―県展に出品された作品も初めは板目木版で出品されてたんですよね。―

（土居）これ（作品図版2：《祭具》1972年）が版画を始めたのが47年前くらいになります。1972年、昭和47年の《祭具》という作品になります。銅鐸に鏡、剣。昔の考古品に興味が大変あったので、表現してみました。

これは説明いたしますと、刷ったときは白黒の版なんです。そして、絵の具を筆でつけております。手彩色といいます。一版手彩色。剣やなんかは手で刷ったのでは表せない。手彩色だからできたということが言えます。

―一版多色刷りっていうことは、一つの版に部分的に色をつけているということなんですよね。―

（土居）そうです。手彩色というのは筆で色を自分が思うようにつけているんです。まあ考え方というか、発想としては、古代の祭具を、なんかこう奥ゆかしく表現してみたいなという、気持ちでやってみました。

―そのほかにもいくつか一版多色刷りの作品があります。―

（土居）これ（作品図版3：《靫》1974年）が、一版多色刷りという作品です。版は1枚、白黒版が1枚ね。それに、もう一つ色をつけて、色を重ねているわけです。それは版の上に色を塗っとるんですね。それでプレスで刷っとる。一版多色刷りというやつです。

これ（作品図版4：《神器》1975年）が大賞を受け

た作品ですが、銅と鏡とね、銅鐸とで2つ版があります。版が2枚です。そして、版の上に色を着けて、そして、プレスで刷っておる。いずれも大きな作品でしたね。縦が70㎝くらいある作品です。

―これが県展で大宮賞を受賞した作品になるんですか。―

（土居）県展で大宮賞という大賞を受けたときの作品です。

―一版多色を経て、モノクロの作品、これ（作品図版5：《sakura》1983年）もまた板目木版の作品なんですよね。―

（土居）これは白黒ですね、小学生、中学生でもできる。ただ、私が気に入ってこれをうちに置いとるのは、なかなか上手にできとるんですよ。ちょっと変わった表現で、ある美術の先生が言いました。

桜の満開の花を表現するにあたって、「これは珍しい表現の仕方ですなあ」というた人があります。

―ただ、桜の花を1個ずつ描くのではなくって、何か少し形を整理して、何かこう動きがあるといいますか、ちょっと風が吹いているように感じられます。

板目木版をしばらくされていたかと思うんですけれど、それから他にも焼き物だったり、木彫だったり、いろんなことをされてましたね。―

（土居）私の仕事は転勤をせないかんのですよね。そして、転勤するたびに何か新しいものを考えたり。

この焼き物（作品図版6）は、ある学校に転勤してみたら、焼き窯がさらのまま図工室にあったんです。この窯を利用せんと、使わんと大事じゃなと思って、初めて楽焼を長いことやりました。そのときの作品です。あんまりええ作品じゃありません。

それからその次、学校を変わりましたら、今度は昭和50年だったかな。石鎚のスカイラインが崩れるほど、大雨が降ってその雨で流された流木ですね。もう川が大水になった。その流木が、いっぱい山のようにあるわけです。その流木の中に朴木があるのを見つけまして、これええわいと、川から引き上げて持って帰って、彫ったわけです。向こう（作品図版7）は、ちょっと円空の真似事をしてみて彫ってみました。

こちら（作品図版8）は木が違います。槐の木といって滅多にない木なんです。槐の木。これね、くれた人が、「恵比寿さん彫ってみてや」とこう言うて、「それなら恵比寿さん彫ってみようか」言うて、言われた通りに彫ってみたんです。その作品です。

今度は石膏像ですね、これは昭和40年くらいやったかな。自分で思いついて、やってみました。石膏取りじゃ言うて、彫塑ですね。やれるかやれんもんか試してみちゃれと思ってやってみたのが、この作品です。石膏取りはたったこれ一つです。愛大の林[3]という先生が大変誉めてくれました。

その木口木版と言いますか、これ（作品図版10:《穴神様》1991年）を写真で見た小学校の同級生が、「明ちゃんこれ木彫りけ？」「いや版画よ」「こがいな版画みたことないぜ」こうおっしゃる。「いやあ、版画ぞ」というて、その同級生は女の子だったんじゃけど、75歳ぐらいのおばさんになっとったじゃろか。それから説明を始めさせてもらいます。

これは、欅の木です。欅の板。朽ちて、裂けかけとるんですね。欅の年輪が非常にはっきりと出るんですね。それに何かこう思いついて、年輪をいかして何か表現してみたいなと思って取り組んだのがこの作品です。その女の子が言うには「覆面の侍の木彫りかと思った」とこう言うて、そう言えば、この木の板の形よね。大変面白いと思いました。

そして、中の灯明。この板は、実は椿の板です。椿の木の板ですが、中に穴が空いとるんですね。それを埋めたんです。埋めて、穴神様を表現してやろう。なかなか木の形もええし。

それから、こう彫っていきよるうちに林もうまいことできんし、なんか穴神様にしようと思って椿の板を別に作って、そして、埋めて、彫ってやったんです。ここらあたり非常に時間がかかりました。灯明が置いてある祠があるんですわ。

―ここ（写真1、2）が入口ですね。穴神様に入る。中は暗いんです。人が1人通れるぐらいの隙間があって、そこから入っていくとこのように（写真3、4）祀られています。―

（土居）あれが祠なんです。この祠を表現するために祠を描いたんでは何かなあと思って、思いついて創造したのが、神を表す言うたら、灯明ですね。朝晩あげる灯明。灯明を表してみようと思って、思いついたのが先ほどの版画（《穴神様》）です。蝋燭の光が円を描いとるでしょ。これは灯明が燃えよるという。私の勝手な想像で表現してみました。

田舎にはこういう穴とか、あるいは滝とかそういうものがあると、何か神仏を祀っとりますね。やはり昔からの、住み慣れた土地の人たちの敬虔な気持ちが残っておるんでしょう。

この穴神様は現在もあります。

―先日、先生のふるさとを訪ねて、行ってきました。日野浦まで足を伸ばして、先生にご案内していただきました。ちょっと入口がわかりづらく、知ってる人しか、たどり着かない場所なんですけど、こういうふうに祀られてました。

先生の生い立ちに触れていいですか。ここに宮柱神社というのが近くにありまして、先生は宮柱神社の神職の子、お父さんが神職をされていたんですよね。―

（土居）はい、わかりやすく言えば、太夫の子でした。

―宮柱神社（写真5）にも立ち寄らせていただきまして、その近くに穴神様があります。先生、ここでの小学校の思い出があるんじゃなかったですか。―

（土居）あ～、小学校4年の時に、昔はねこの穴神様に人がいつもお参りしよったんです。通学路の横にあるんで、そこに供えとるお酒があったんですな。それを3人で飲んでみるかなと言って3人で飲んだんです。そしたら2人は酔うてしもうて参って、知らんもんじゃから、2人はように寝込んでしもうて、私だけが颯爽としとるな、なんか昔から酒が強かったんじゃろ。そんな思い出があります。

―先生のさっきの《穴神様》の作品なんですけれど、三間の展示を見られた方はいらっしゃいますか。土居先生の夏の展覧会[4]を。ありがとうございます。そのときに同じ版木で作られてたものがあったかと思うんですが、先生が、黒いところは椿を埋めましたという話があったかと思います。ここを、三間の作品では違うモチーフのものを入れ込んでましたよね。お地蔵さんでしたっけ。―

（土居）これね。三間に飾っている作品では、この中の空洞のところがお地蔵さんなんです。板は欅の木で間違いない。けど、中に埋めた椿の絵はお地蔵さんと、これと、2枚あるんですね。そんな遊びもしてみました。この版画の面白さでもありますね。遊びもできるっていうのが、面白いですね。これが木口でなければできない表現ですね。この形も本当に独特ですね。はい。形もいいんですね。女の子は覆面の侍じゃ言うたけど、何かに見える。

このタイトルは《花笑い鳥歌う木立は踊る》（作品図版11：《花笑い鳥歌い木立は踊る》2021年）。

これは、小学校の頃に習った『ゆづり葉』という河井酔茗の詩があるんです。その一節をお借りした。なぜかというと、もう、大分お年を召してくると、だんだん笑いもなくなってくる。歌うこともなくなってくる。いや、それではいかん。

「木立が踊る」というのは、2つ作品があります。最初に作った一つは、風に揺れる木立、雑木林、これから連想してフィギアスケートというのがあって、足をピャーとあげて、チャーと滑る。その連想をして、1作目は森の木立が踊りよるのを作ったんです。それから、連想して、待てよ、もう一つ木立は踊らしてやろうと思って。あれ、中に胸を張ってお尻をぴゅっと出して踊りよる。これ、木の幹です。手が上がっとります。これが枝振りです。そして、頭にあるのが、鳥です。まあいい加減なもんです。これ心象表現。それで花を散りばめて、河井酔茗の『ゆづり葉』の表現をしてみました。ということは、人生長いけれど、楽しく、踊って、歌って、語りおうて、過ごしましょう。そういう意味で、表現してみました。

―『ゆづり葉』の朗読―

（土居）最後の方にあります。「ひとりでに命は延びる、花のように笑い、鳥のように歌っている間に」この文句が非常に好きなんです。小学校の頃の思い出です。学芸員さんが誉めてくれました。「先生賢かったんやな」と。それを、今でいうパラダイスを絵にしてみました。

―これが（写真6）ユズリハの木になります。ちょうど一緒に宮柱神社や穴神様に行ったときに、旧美川小学校を尋ねたところ、たまたまユズリハの木がありまして、それを撮ってきたんですけれど。このようにちょうど入れ替わるところで、右下が落ちた葉になります。―

（土居）このユズリハは昔からお正月に使い寄りますね。代々譲ってといって。ちょうど美川南小学校ですが、今は廃校でありません。ここにお二人の先生が小倉先生に黒田先生がおいでますが、そのお二人の先生も美川南小学校でお勤めをしておりました。私の母校です。

これ（作品図版12:《秋声》2018年）、題名は《秋声》です。ずばり申しまして、室町文化、墨絵の盛んであった室町文化ですね。画家の名前はさておいて、その時のいわゆる画家の名画、名画を見るような、これは作品です。というて、関心せいでいいです。自画自賛というて、辞典を引っ張ったら書いております。我が作品、これを含め。

これは構成がよかったと思います。まず、月の明かりは、普通、月の近くが明るいですよね。ところが、地面の方を明るくして、これもちょっと想像せんところだと思います。そして、3つの株のススキ、これが

バランスよく配置されておる。それと、明暗がちゃんとできて、白黒の面積が非常によかった。どこか虫の声が聞こえてきそうな、秋の気配。今10月ですか。時で言うたらもうちょっと向こうかな。なんか、田舎の道を歩くとこういう景色に出会います。

私のふるさとでは、当たり前であった。私が若い頃には、30代ぐらいだったと思いますよ。クツワムシというガチャガチャ鳴く虫がおりまして、今、全部おりません。スズムシもおらんような気がしますね。コオロギはまだだいぶおる。虫も減っていきよると。過疎化というのは、虫も過疎になっていきよる。こんなことをこの間感じました。でも、これを見よると、何か歌が出てきそうだなこう思います。「あれマツムシが鳴いている…♪」そんな歌が聞こえてくるような静寂というか静かなムードですね。実にいい作品だと思います。

―作品の中にはいつまでも、美しい自然が残る、目に焼き付いた自然が残せるというのはいいですね。自然はどんどん変わっていくけれど、作品では思い出や記憶に残る自然を閉じ込め、残すことができますね。―

（土居）ふるさとの森羅万象を作品として残したい。これが私の心情。

―とても月の光を感じられる素敵な作品だと思います。―

（土居）これ（作品図版13：《雲湧く》2005年）、雲が湧きよりますな。瓶ヶ森から石鎚を眺めた。ちょっと山の形が違います。これは朝まだき、夜明け前です。上浮穴には、博物同志会という会がありまして、毎年夏になりますと、登山をするわけです。山登りを、この上浮穴からおいでとる先生方の中にも一緒に登った人がおいでます。その朝まだきのときに瓶ヶ森からみた景色です。雲が湧く、実にすごいですね。現場をみんとわかりませんが、谷底からごっごっ音がするくらいに雲が湧いて上がります。その気持ちを表してみたいな、と思ってやりました。

うまくできたかなと思うのは、私としては造形としては、遠近、三筋の雲ですね、近景の雲、中景、近景の笹原、この三段法を取り入れて構成してみました。で、土居流、私風いうのは、空にある三筋の雲です。普通飛行機雲かなと思うけど、全くそのときには、飛行機雲を知らない、飛行機なんか飛びよらんので、これは私の想像、この想像は画面で非常に大切なポイントなんです。空は、のっぺらぼうでしょう。何かポイントが欲しいなと。これをぱっと見た人は、飛行機雲が飛んどると思う、それでいいと思うんです。

これが（写真7）本物の瓶ヶ森です。向こうに見えるのが石鎚です。私の絵とちょっと違うけど、雲が湧きよる、下から、少しこれは太陽があがっとるから雲が優しいわいな。朝まだきの雲はこんなもんじゃない。ゴンゴンゴンゴン上がってくる。自然現象というのはすごいと思います。それを、絵にしてみました。

私の創作活動にはヒマワリをよく使います。それも花の盛りのヒマワリとは違います。実が大きくなって、熟れて、頭を下げて、重厚な感じ、重々しい感じ、それをいつも表現してみようと、絵に描いてみよります。これ（作品図版14：《向日葵1》2016年）もう一つの作品ですが、構成としては大と小の花のバランス、そして、葉っぱの動き、そういったものを表現して、大きな空気の下に生えておるひまわりを表現したと思っております。

これ（作品図版15：《風立つ》1991年）は、原風景ですね。部落は今も現存しておりますが、この景色はもうありません。黒藤川という久万高原町、元美川村黒藤川、そこにとろめきという部落があって、前に岩が市という部落があります。その岩が市のとうきび畑から描きました。これは原風景、今はありません。言うたら文化財です。これが上浮穴の人らもおりますけど、懐かしいですね。

とうきび言うたら、焼きとうきび。三坂でよう売りよりました。焼きとうきび、それから、はったい粉、それから、昭和16、7年頃じゃったかなあ。学校へ行くと、昼は弁当じゃった。友達の弁当の蓋を開けると卵ご飯、というのはとうきびを炊いたら、黄色いんです。米粒はあんまり入っていない、そのお弁当をみんなが持ってきよる。なぜそうじゃったかというと、その頃お米は大概供出と言って、兵隊さんに送るんじゃった。そんな関係で非常に苦しくはあったけれど、思い出は楽しいです。

―作品の技法的なことで、展示室で飾っている作品と今見ている作品と違いが実はあるんです。今、展示している分は、左右が逆になっているものが展示されていて、木口の技法で鏡貼りというのが、あるんですよね。雁皮紙という薄い紙に刷り、刷った裏を見せている場合があります。で、今、展示しているのは画像と左右が逆になってるものが展示されていると思うんですけれど、木口の中でそういった鏡貼りというのがあって、それをあえて裏と表で刷ったもの並べて作品にしたりする作家さんもいるんですよね。

（土居）この鏡貼りというのは、雁皮紙やないとできません。木口やからこれもできるんです。と申しますのは、裏と表、一緒に貼ることができる。したがって、ある作家は椿の板というのはこまいから、大きい作品を作りたいというとこの鏡貼りの作品を作っておりますね。そんな表現もできる。最初に持ち帰った作品は、これが逆やったんですね。あれは汚れとる。版も上の方でしょう、最初の頃の作品ですから、全然ダメということで、三間から戻った作品を入れ替えたんです。

歩きよる婆さんが目につくんですよ。上の方に婆さんが歩きよるんですよね。杖ついて。これなんかは私の作品で創ったんです。実際は婆さんは歩きよらなんだ。けど、昔々の物語。婆さんが一番ええなと思って、描いてみました。

これは相当時間がかかりました。というのは葉っぱの、葉脈の一本一本をビュランで彫っていくのに、相当慎重であったし、時間がかかりました。自分ではいい作品だと思います。

これ（作品図版17：《黎明》2004年）は《黎明》。題名がすごくいいですね。木口版画だからできるという場面があるんです。山をみてください。あの表現は木口版画の線描表現をしております。水が谷へと流れていく、山の流れを、木を描いたり、流れにしたりするんですけど、私は線で表しました。これがビュランの仕事だと思います。

炭焼きは一晩中、炭窯で炭を焼き、火入れをしました。この人が。今、火入れが済んで、家に向かっております。一晩中火を焚く、生木に火をつけるんですから、なかなか火がつかない。今、朝まだきに帰って行きよるところですが。それをひょっと見ると仁淀川に雲海、雲がたなびいて埋まっております。実に雄大な景色です。そこを一人のお爺さん、労働者が帰っていきよるわけですけど、向こうに煙が立っております。これが一晩中この人が世話をした炭窯です。今、煙がたなびいております。なんとも言えん景色なんです。これが昔の上浮穴の原風景じゃった。

私が苦労したのは、この人の目なんです。どんな苦労をしたかと言いますと、この人は、我々も経験がありますが、もしや一晩中焚いて火がついとるじゃろか、火が消えてはないか、実に不安ですね。その不安な気持ちで見たい、後ろを向いて見たい。煙が出よるか出よらんか見たい。この人はそう思って。でも、なかなか後ろに向くことができない。そこで私は、その気持ちをどう表現したらいいんだろうと、非常に難しく考えました。何日もかかりました。そして、ひょっと思ったのが東洲斎写楽の役者絵の目、パッと思い浮かべて、あっこれじゃ、と思って、あの目は、東洲斎の目にヒントを得た目なんです。

―これ（写真8）が日野浦。その集落が藤社（ふじこそ）というところで、土居先生が生まれたところです。―

（土居）私の生まれ在所です。明神さんが雲にかかっています。向こうの山が明神さんです。

これ（作品図版18:《恩愛》2010年）、題名が《恩愛》です。わがしの恩に愛する愛です。なんでこんな題名が生まれたのか、自分でも、ああよかった、と思っております。この絵を見て、語ることはあんまりないと思います。見ただけで、ああそうか。ただ、言うなれば、私の構成です。この絵の、それについてお話をします。

年老いた老夫婦の一時の風景です。どうやって、お婆さん、お爺さんを表そうかな、と思って考えたのは、この頬をすっとるとこなんですよ。この構成は、現場としてみたことがありません。今ならなんぼでもあると思います。昔の人たちは慎ましやかで品が良かったですよ。品というか、頬を寄せつけるということはない。でも、私は寄せ合わせてみようと思って、構成してみました。

この絵から受ける心情、夫婦敬愛する気持ち。なんか聞こえてきそう、会話が。「婆よ、だんだんな、おおきにありがとう」と。なんかしんとします。

（土居）これ（作品図版19：《生々流転1》1991年）は枠を見てください。年輪が見えるでしょ、はっきり。これは製材に落ちとったんですね。木口、杉の大木の木口をそのまま放っとったんです。だからそれをもろてもんて、それを切って、枠を作ってみた。何かこの中に入れるものはないかな、と思って考えた。発想としては、老木の元はと言えば、種から始まった。なんかそこら辺りを絵にしてみようと思って、真ん中にありますが、老木の中にはや次の世代の芽が出よる、鳥は卵を産んで去っていきよる。生々流転。生者必滅、生と死、そんな大袈裟な表現をしてみたらと思って、作ってみました。見てみるとそれほど深刻には思えません。

これ（作品図版20：《山守Ⅱ》2008年）は愛媛県美術館の鈴木学芸員さんが非常に喜ぶんですが、展示しているのに「山守」という絵があります。それを子供らに感想を書かしております。その一場面。杉山の中からばっと現れて出てくる。なんか怖い。これも一つ

の経験として記憶に残っとるんですが、子供の頃よく、遊びに行って、遊び過ぎて帰ってくるんです。そんなとき、藪の中を通らないかん、その時に出会うのが、この人やった、恐ろしかった。そやから、この顔は怒っとるようなけど、何か微笑んどるような、言うて学芸員さんは解説しとります。そういう思い出の作品です。子供の頃には、山の中にはこういう人がいつもおりました。

これ（写真5）が、私の生まれた家の氏神様です。宮柱神社と申します。作品では獅子を対に一緒にしております。狛犬、または獅子と言いますが、よく調べてみますと、神を守る霊獣、魔除けをする霊獣というのが獅子らしいです。この獅子は、大概のお宮に飾っております。対にして置かれております。が、藤社の宮柱神社にある獅子の像は、親子像なんです。よく見てください。子供が這い上がっております。これ（作品図版21：《親子獅子》2012年）は近郷近在にない作品です。どこでもみたことがない。この作品を絵にしてみようと思いついたけれども、2つ分かれて、対を別々に表現するじゃいうことよりも、まとめて一緒に表現してみようと思って構成したのが、これなんです。実際は別々におります。

子供の頃には、この境内によく遊びました。そのときには獅子が怖いので、驚いたことがあります。今も現存しております。

今、美術館に米山の書を展示しており、お幟がだいぶこと立っております。なんかムードが一緒みたいやなと。歌が出てきそうな。「村のはずれの～♪」

―版木は久万から調達されているんですよね。―

（土居）山桜、楓、サルスベリとかを使われています。材料は椿の木の板です。割れがあるでしょ。あれが大変ええという学芸員さんもおいでました。

これ（作品図版22：《蘇生》1996年）は、《蘇生》という題がついています。苦しい難儀な人生じゃった、だけどまた生き返ろう、そんなところから、発想してみました。瓦礫の中から出てくる、周囲は瓦礫です。その中から再び生まれ変わって生きていこう。という人生訓を表して見ました。

この絵を見た友達に「ピカソの絵か」と言われ、「わしのやが」「嘘言うな」というやりとりがあったことを思い出します。

―右と左が違う人がくっついている感じがしますね。―

（土居）右と左と顔が違う。左の顔は沈んどるんでしょ、昔の私。こちら生まれ変わった明るい顔の私、ということ。蘇生。なんか人生訓かな。

―版木の種類もいろいろ使われていると思うんですが、形であったり、割れ目などを活かしながら作品を考えられているんですね。―

（土居）木口版画に使っている板なんですけど、この板は椿[5]。形を生かそうと思って発想するんです。

これ、大きいの。縦が50センチ横が40センチ。こんな木はちょっとありません。これは百日紅の木なんです[6]。今も使っております。

この百日紅は、こんな大きいのは面河渓にしかありません。それぐらい大きな木なんですね。

これは楓です、いろは紅葉[7]。これは山師の人が小田深山というところがあります。今は内子町です。その山から伐って帰ってくれました。

私が使っているのは、まず椿。そして、この楓。長い板、あの集成とかいう。これは桜です[8]。桜といっても山桜。山桜といっても山桜の根元、いわゆるコツなんですね。その板を利用しております。

〔付記〕

書き起こしにあたり、文章として読みやすくするため、言葉の補足、修正を行った。

イベント前の打ち合わせで、聞き取りした内容と併せて、土居明生の経歴を以下に補足する。

土居が木口木版画を始めたのは、年齢にして50代半ばである。

1985年、家庭訪問で訪ねた児童の家の囲炉裏端に置かれていた藪椿の木口の茶瓶敷きがあり、それに鋭い刃物で文字が刻まれていた。これが木口木版画を始めるきっかけとなる。

当時は、木口木版という言葉も知らず、自作の鑿で木口に絵を彫り始め、独学で技術を修得する。

作品のモチーフとなるのは生まれ育ち、長年過ごした久万周辺の自然、くらし、人である。ふるさとに対する思いや親しい人への愛情を込めて、木に刻む。郷愁を誘う感傷的な作品もある一方、ユーモアを交えた笑みを誘う作品もある。木口の特徴とも言える白黒の描写、線描、点描を駆使し、表現する。

版木となる木口も地元で調達し、時に知り合いの山師とともに山に入り、木を選ぶ。そういう境遇により、材料に恵まれ、木口では珍しい大作も可能となる。円形のものだけでなく、変形した切り口の板材を用いることもあり、自然の木の形から着想を得た作品を生む。

大きな版木は、数枚刷り終えた後、版面を磨いては繰り返し使われる。版をリセットしては、次の作品の構想を練り始める。

91歳を迎えた現在も、毎年、出品を続ける県展、市展、日本版画会展のために、スケッチに出掛け、創作に励み続ける。

年譜[9]

1930年　上浮穴郡美川村（現久万高原町）日野浦に生まれる。
1948年　小学校教員となる。（1990年退職）
1950年　武蔵野美術学校西洋学科通信教育に入学
1956年　第5回秋季県展、《ひまわり》(油彩）入選
1958年　第7回秋季県展、《花》(油彩）入選
1972年　木版画を始める。
　　第21回秋季県展、《祭具》版画部推奨受賞
1974年　第23回秋季県展、《靫》(板目木版）版画部推奨受賞
　　＊以降、毎年版画部に出品。
1975年　第24回秋季県展、《神器》(板目木版）大宮賞受賞
1976年　愛媛版画協会展（～1988年）
1977年　第26回秋季県展、《鎧》推奨受賞
1986年　第26回日本版画会展、《古里のみち》(木口木版）入選
　　＊以降、木口木版を毎年出品
1987年　個展／文教会館（松山市）
1988年　第37回秋季県展、《高原の秋》特選受賞
1990年　第39回秋季県展《追憶》知事賞受賞
1991年　愛媛県美術会会員となる。
　　松山市民文化祭第10回美術展
　　＊以降、毎年出品
1993年　第42回秋季県展、《仏性》会員優賞受賞。
　　愛媛一陽版画展出品。（～2001年）
1994年　個展（ヒロヤ画廊、松山市）
1996年　星が岡の精鋭たち（星が丘アートヴィレッジ、高知市）
2000年　個展（ギャラリーキャメルK、松山市）
2001年　個展（ギャラリーキャメルK、松山市）
2002年　日本版画会準会員となる。
　　個展（ギャラリーキャメルK、松山市）
2003年　伊予版画協会展（～2011年）
2004年　第45回日本版画会展、《大宝杉》準会員賞受賞
2005年　日本版画会会員となる。
2006年　個展（ギャラリーキャメルK、松山市）
2009年　愛媛県美術館友の会「木口木版画教室」講師
2010年　愛媛県美術会参与会員となる。
　　個展（ギャラリー黒猫、松山市）
　　個展（古岩屋荘、久万高原町）
2011年　個展（ギャラリーカフェ KIKUJIRO、久万高原町）
2012年　えひめ版画協会展　＊以降、毎年出品
　　個展（古岩屋荘、久万高原町）
　　個展（画夢舎、松山市）
2015年　愛媛県美術会名誉会員となる。
　　第56回日本版画会展、《乳出大銀杏》馬渕賞受賞
2018年　土居明生　木口版画・刀画展（ギャラリー黒猫、松山市）
2021年　土居明生木口木版画展―ふるさと賛歌―（畦地梅太郎記念美術館、宇和島市）
　　アートの森プロジェクト「森のなぞなぞ美術館―木の版画はおもしろい！―」(愛媛県美術館、松山市）
　　第62回日本版画会展、《権現の滝》文部科学大臣賞受賞

本稿書き起こしにあたり、土居明生氏にはご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

〔註〕

1　アートの森プロジェクトは、県産材を使用した額や看板を作成し、森林に関するテーマの展覧会、関連イベントを開催する事業である。

2　令和３年度アートの森プロジェクト「森のなぞなぞ美術館Ⅱ―木の版画はおもしろい！―」は、令和3年7月17日（土）から10月4日（月）まで、常設展示室３で開催した。

3　上浮穴地区の図工美術の講習会で、愛媛大学の林俊昭に彫塑の指導を受ける。

4　畦地梅太郎記念美術館で「土居明生　木口木版画展―ふるさと賛歌―」（会期：2021年6月2日～8月2日（月））が開催された。

5　椿は《蘇生》《食む》の版木に用いられている。

6　百日紅は《黎明》《恩愛》《山守Ⅱ》《親子獅子》の版木に用いられている。

7　楓は《望郷》《風立つ》の版木に用いられている。

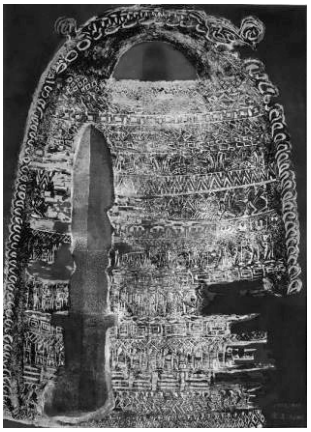
８　山桜は《雲湧く》《向日葵1》の版木に用いられている。

９　県展、日本版画会の入選は、初入選のみ記した。公募展出品多数あり、一部のみ記した。

〔作品図版〕

注：10～21の技法は、木口木版

1.《ひまわり》1953年 油彩



2.《祭具》1972年 板目木版

3.《靭》1974年 板目木版

4.《神器》1975年 板目木版

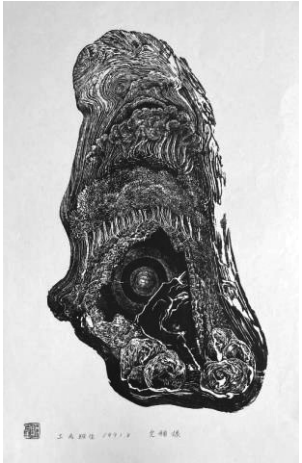
5.《sakura》1983年 板目木版

6.楽焼

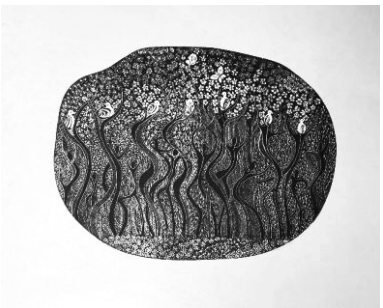
7.木彫

8.木彫

9.石膏像



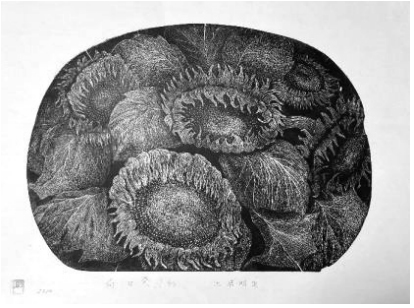
10.《穴神様》1991年



11.《花笑い鳥歌い木立は踊る》2021年

12.《秋声》2018年

13.《雲湧く》2005年



14.《向日葵1》2016年

15.《風立つ》1991年

16.《望郷》1989年

17.《黎明》2004年

18.《恩愛》2010年

19.《生々流転1》1991年

20.《山守Ⅱ》2008年

21.《親子獅子》2012年

22.《蘇生》1996年

23.《食む》2020年

〔写真〕

1

2

3

4

5

6

7

8

令和３年度アートの森プロジェクト「森のなぞなぞ美術館Ⅱ―木の版画はおもしろい！―」
土居明生出品一覧

	作品名	制作年	技法・素材	寸法 （縦×横／cm）	図版
1	望郷	平成元年（1989）	木口木版・紙	53.8×41.5	16
2	食む（版木含む）	令和２年（2020）	木口木版・紙	32.7×28.8	23
3	風立つ	平成３年（1991）	木口木版・紙	52.2×44.2	15
4	花笑い鳥歌い　木立は踊る	令和３年（2021）	木口木版・紙	41.0×53.8	11
5	生々流転１	平成３年（1991）	木口木版・紙	67.1×51.5	19
6	蘇生（版木含む）	平成８年（1996）	木口木版・紙	39.0×29.7	22
7	黎明	平成16年（2004）	木口木版・紙	49.0×70.7	17
8	雲湧く	平成17年（2005）	木口木版・紙	41.8×57.0	13
9	山守Ⅱ	平成20年（2008）	木口木版・紙	65.8×50.8	20
10	恩愛	平成22年（2010）	木口木版・紙	56.3×72.2	18
11	親子獅子	平成24年（2012）	木口木版・紙	61.6×51.0	21
12	向日葵１	平成28年（2016）	木口木版・紙	41.2×54.5	14
13	秋声	平成30年（2018）	木口木版・紙	40.2×56.2	12

※全て、作家蔵